「入道西行」をめぐって

坂口博規

一

西行の宗教者像をめぐって、従来より様々な検討がなされてきている。西行は言うまでもなく歌人であり、その人となりは、やはりその作歌のうちより求めねばなるまい。

しかし西行像を考えてみる上で、単に僧体歌人、隠遁歌人という、我々が漠然と思い描く隠遁者像では計り知れない仏道修行者像が浮かび上がってくる。国文学研究の対象という領域を越えて、宗教史上の位置付けも要求されている。[注1] 中世精神の開拓者乃至中世隠遁を開いた西行という先学の評価は、後世西行が出家遁世者の典型として憧憬の対象と仰がれたことでも理解出来るが、それは大きく思想史上で西行を考えてゆかねばならぬこととなる。

作歌こそは西行自身の自己を語る言葉である以上、作歌と全く切り離して、西行像を論じることは許されないことかもしれぬ。その作歌に、宗教者西行の影をどこまで考えられるかとなると、にわかに論じる訳にはいかないが、しかしある歌の中から、宗教者西行像を描くことは可能である。しかしそれとても、亀井勝一郎氏が指摘される如く[注2]「密教の行者、浄土教の信者、法華経の持者、神々への畏敬者」という四つの宗教的要素が考えられ、

西行の対象自体の不可解性は依然として残る。その人となりは、その作歌のうちより求めねばならぬことは大切なことであるが、詞書も含めて、自己を語るに西行が雄弁であったかとなると、その評価の基準もさることながら、私はさして雄弁な人であったとは思えない。和歌三十一文字、また詞書の役割、その制約の問題は別として、多く語られなかった実生活、あるいは秘密めかして語り出した行実の諸相を、西行の宗教生活の問題として考えたいと思うのである。

本稿では、仏道修行者西行を考える一端として、西行が「入道」と称されている点について、少々私見をまとめておこうと思うのである。

二

高尾神護寺の文覚上人の高弟として、身命をかけて随従した上覚房行慈の著わす歌学書『和歌色葉』に、西行の名が見える。上覚は明恵上人の母方の叔父、即ち湯浅宗重の子であるが、「湯浅系図」（『続群書類従』六輯上）には登場しない。二男盛高と六男宗方の間の男子が記されていないので、恐らくその間に生まれたのであろう。また上覚は顕昭の指導を受けた、六条家歌学の系統に属する歌人と知られている。

『和歌色葉』全三巻は、序を『大鏡』様式に模して、雲林院の菩提講で老僧が少年のために歌話を試みたのを、隠士が書き留めた形式で、上巻には「和歌縁起」「種々名体」「避病次第」「詠作旨趣」「撰抄時代」「名誉歌仙」「通用名言」「万葉集所名」、中・下巻に「難歌会釈」を収める。このうち「名誉歌仙」部に西行が登場するのである。

「名誉歌仙」部は全部で八項からなっており、各項は『万葉集』から『千載和歌集』に至る古今の歌人をほぼ

時代順に挙げる。その各項と人数を挙げると、

「帝王二十三代」二十四人（東宮院一名加う）「貴女」二十人「親王」十八人「大臣」四十三人「俗」百六十人「女房」八十二人「僧」七十四人「入道」三十六人　計　四百五十七人

であり、西行は「入道」三十六人の一人として挙げられている。即ち上覚は西行を「入道」と見ている訳である。そこでこの三十六人の法名のみ挙げると、

満誓　三方　寛蓮　戒善　安法　寂源　如覚　寂昭　能因　叡覚　信寂　観心　念西　素意　覚寂（俗名道経）　蓮寂

寂超　寂念　寂然　覚如　観蓮　道因　敬心　西好　西遊　願西　空仁　西行　西住　静蓮　蓮寂（俗名重家）　釈阿

生蓮　寂恵　寂蓮　勝命

の三十六人であり、ちなみに西行については、

続詞　右兵衛尉入道西行〔始円位〕俗名〔藤〕範清〔左衛門尉康清息〕（『日本歌学大系』第参巻所収による）

と出ている。

ところで安良岡康作氏は、この『和歌色葉』の「入道西行」と、九冊本『宝物集』末尾「宝物集近代作者」中の「紗弥（ママ）十七人」に、「西行憲清入道」と取り挙げられていることから、

西行について第一に注意されるべきは、彼が、いままで漠然と考えられて来たような、真言宗内の僧呂ではなくして、兼好や親房（法名としては、宗玄（そうげん）、もしくは覚空（かくくう））と同じく、沙弥（しゃみ）であり、入道であり、遁世者であったことである。――中略――彼が、保延六年（一一四〇）の秋に二十三歳で出家した事実は周知の通りであるが、その実質は、遁世者となり、入道・沙弥として生きることにあったことは、その後の彼の行実

の示している通りである。一寺の住持になったこともなく、僧位・僧官を得たこともなく、各地を遍歴し、歌人として贈答したり、指導したりしているのも、その社会的位置が真言宗内になく、従って、その規制の外にあったことを示すものである。

と述べておられる。[注3]「入道」とは仏道修行のため剃髪出家すること、仏道に入った人を言い、「沙弥」とは剃髪初心の僧乃至若年で受戒したばかりの僧で、修行の未熟な僧を言うが、一般にいずれも、出家剃髪後も俗世間（俗家）に住み、妻帯して在俗者とかわらぬ生活をしながら仏道修行をする者、要するに僧にも非ず俗にも非ずという者と理解されている。安良岡氏が出家後の西行の行実を説かれ、西行の社会的位置が真言宗の規制の外にあったとされる点は、まさにその通りで、また出家後官僧の立場を取らなかったという点で吉田兼好や北畠親房と同じと言ってよいと思うが、西行が撰択し実践した宗教生活は、兼好や親房と同じとは思えないのである。

そこでまず『和歌色葉』の「入道」項に取り挙げられた人々は、著者上覚がどのような基準で選んだかということを考えたいと思うのであるが、実はこの点については、佐藤正英氏が既に好著『隠遁の思想西行をめぐって』において検討されておられるところである。

佐藤氏は、「僧」項七十四人と「入道」項三十六人にそれぞれ分類される人々は、一体どこがどう違うのかという疑問を呈された後、「僧」「入道」各項の人々から、以下の点を論じられている。[注4]即ち「入道」項の人々は、(1)「法師」という呼称を用いず、(2)必ず「――入道」と記し、(3)「――」にあたるところを在俗時の官位や通称をあて、(4)その後に俗名を記す、という形（(1)～(4)は筆者が付す）を指摘されている。前引の西行の例でも確かめられるであろうが、更に西行と深く親交を結んだ常盤三寂と俊成、及び西行が家集で常に「同行」と称した西住の記述

を見ると、

前長門守入道寂超　俗名為経、丹後守為忠息
続詞千載　伊賀大進入道寂念　俗名為業、同息
続詞千載　壹岐入道寂然　俗名頼業、同息
千載　右兵衛尉入道西住　俗名源季正
詞花続詞千載　五条三位入道釈阿　俗名俊成卿、本名顕広、俊忠師息〔皇太后宮大夫〕

とあり、「官位乃至通称―《入道》―法名　俗名」の形がとられていることが分かる。

また「僧」項の人々については、(1)俗名は記されず単に誰の子息にあたるかを記し、(2)「入道」項の人々のように官人であった時期を持っておらず、(3)成人したときは既に出家者の世界に身を置いている人々であり、(4)彼らは僧位僧官をもって呼ばれ、(5)それに従って序列づけられており、(6)その最下位に無位無官の僧が位置している形を指摘されている。そこで僧位僧官による序列と、そこに取り挙げられた人々（法名のみ）を挙げると、最初に達磨和尚・菩提僧正・行基菩薩・徳一菩薩の四人を挙げて、以下、

「大師」伝教・弘法・慈覚・智証　「僧正」遍照・聖宝・深覚・明快・静円・仁覚・行尊・永縁・行慶・覚忠

「法印」教円・清成　「大僧都」玄賓・観教・隆円　「僧都」清胤・公円・覚雅　「法眼」源賢　「律師」真静・長済・慶暹・実源　「法橋」静昭・忠命　「擬講」宗延　「已講」勝超　「阿闍梨」道命・隆源・顕昭　「得業」静厳　「堅者」隆縁　「供奉」慶範　「入寺」聖梵　「貴所」静蔵　「定額」戒秀　「上人」空也・増賀・性空・日円・日蔵・玄範・良忍・瞻西　会坂蟬丸・宇治山僖譔　「法師」素性・山田・兼芸・

承均・蓮仲・勝観・寛祐・兼慶・恵慶・円松・増基・元慶・永成・懐円・良暹・永胤・永源・源縁・俊恵・登蓮

と七十四人が挙げられ、蟬丸・僖譔（喜撰）は別として「法印」以下は「法名―僧官・僧位等」の形で記されている。

こうして佐藤氏は「僧」項と「入道」項に分類される人々の違いを指摘されて、更に「入道」項に取り挙げられた人々について、

「入道」のひとびとは、法師という呼名においてのみならず、剃髪し、墨染の衣をまとうといった外見の点からしても、あるいはその生活様式からしても、「僧」の最下位のひとびととほとんど区別がつかない在りようをしていたであろうと思われる。しかし「～入道」という呼名が示しているように、彼らは官人からの隠遁者として、隠遁後もある意味で官人たることを背負い続けている点において、官僧の世界に属するひとびととはっきりと区別されている。彼らは、原則として僧官僧位を持つことはない。彼らは、官僧の世界に対しては、あくまで外部の周辺的存在にとどまっているのである。

と論じておられる。[注5] 西行は「官人からの隠遁者」という基準で、著者上覚により「入道」項に取り挙げられたということになる。西行の宗教生活の実体をふまえた形で、上覚は西行を「名誉歌仙」として取り挙げてはいないと私には思われるのである。西行は文治四・五年頃高雄神護寺を訪れたことが考えられている。[注6] 上覚の弟子にあたる年若い明恵に、西行は和歌・仏道一如の和歌観を語っている。上覚と西行が高雄で出会う可能性があることは、既に先学の論じられているところである。[注7] 西行は、同時代の歌人にその家集等で「西行上人」「円位上人」「円

位聖」と称呼されていることは周知の通りである。西行在世中で言うと、晩年「円位」と称されるのであり、俊成は西行自歌合『御裳濯河歌合』の判をした際一番判詞に「上人円位」と記している。上覚と西行が高雄で親しく会って話を交わしたか否かは、それを証するものがない以上不明と言わざるを得ないが、当代異彩を放つ「円位上人」「円位聖」の存在は、歌人でもある上覚が知らぬはずはあるまい。『和歌色葉』では「上人」は、前引の如く「僧」項に位置付けられており、空也や増賀、性空らが名を連ねている。西行もまた「上人」と在世中に称呼されていたのに、「僧」項に取り挙げられなかったのは、前述した佐藤氏の御論の通り西行は「官人からの隠遁者」たる「名誉歌仙」として、「入道」項に取り挙げられたということによるであろう。

『和歌色葉』の「僧」項の「上人」に取り挙げられた人々を見ると、その一人瞻西は、『今物語』において、

京極太政大臣と聞えける人いまだ位あさかりけるほどに雲居寺の程を通られけるに。瞻西上人の家をふきけるをみて。雑色をつかひにて。

ひしりのやはめかくしにふけ

といはせて車をはやくやらせけるに。雑色のはしりかへるうしろに。小法師をはしらせて。

あめの下にもりてきこゆることもあり

といはせたりける。その程のはやさ。けしからざりけり。

（『群書類従』第二十七輯所収による）

として登場する。京極太政入道藤原宗輔が未だ位の浅き頃雲居寺の側を通りかかったことがあったが、その時瞻西の庵が屋根を葺替えているので、「目隠し」に「妻隠し」をかけ妻帯しているのを皮肉ったので、瞻西はわが隠し妻は天下周知のことであると即座にやり返したという話である。ここに「瞻西上人」を、宗輔が「ひしり（聖）」

と称呼したことが見える。前記の「僧」項中の「上人」八人を見ると、例えば『日本往生極楽記』十七話で、空也は「阿弥陀聖」「市聖」と号したことが、『大日本国法華経験記』巻中第四十五話で性空、巻下第八十二話で増賀が「聖」と称され、また日円も『拾遺往生伝』巻下二十一話で「俗呼びて美作の聖と云ふ」（原漢文）と見え、日蔵は『荏柄天神縁起』にて、地獄に苦しむ醐醍天皇が、

冥途には罪なきを主とす。ひじり。我をうやまふ事なかれ。我父寛平法皇の御心たがへまいらせ。無実によりて菅丞相をながせしつみによりて。此地獄におちたり。汝娑婆にかへりて。我皇子にこのくるしみ患たすけ給へと申べし――下略

（『群書類従』第二輯所収による）

と日蔵に願ったというところがあり、ここに日蔵に「ひじり」と呼びかけているのである。これらの人々は、呼名において「上人」「聖」と両方で称されているのは、西行が「円位上人」「円位聖」と称されているのと同じである。

一方「入道」項に取り挙げられた人々の中では、「大原少将入道寂源」（「俗名時鈒、一条右大臣御息、母中納言朝忠卿女」）は、『古今著聞集』巻第二「釈教」第二の五十四「少将の聖常行三昧の事」において、

少将の聖も大原山住人也。卅余年常行三昧を行せられける間に、毘沙門天王形をあらはして、上人を守護し給けり。其影像を等身に図絵して、いまに勝林院に安置せられたるなり。此上人臨終の時は、勝林院に常行三昧行ける時、西方より紫雲現じて、堂の内へ入ると見る程に、肉身ながら見えず。即身成仏の人にや。

（日本古典文学大系所収による）

として、寂源もまた「上人」「聖」と称される人物であることがわかる。他に「入道」項の人々では、前引「右兵衛尉入道西住」は、西行がその家集において「同行に侍りける上人」と呼んでいるし、俊成の『長秋詠藻』中巻に

「西行、西住なといふ上人とも」（「私家集大成」3、二一八番詞書）とも記している。また「三河入道寂昭」（『俗名三河守大江定基、参議斎光息』）も、『古今著聞集』巻第五「和歌」第六の一九七「大江定基鏡売の女の歌に依りて出家入道の事」において、

出家の後、寂照上人とて入唐しける。かしこにては円通大師とぞいはれける。清涼山のふもとにて、つねに往生の素懐をぞとげられけり。

（前同、傍点筆者）

とあって、寂昭も「上人」と称されている。[注8] 殊に西住は『伝燈広録』『血脈類従記』等により、醍醐寺理性院開祖賢覚の付法二十七人中の一人であることを知る。高野山大伝法院並びに金剛峰寺の両座主となった覚鑁と、西住は兄弟弟子に当たる。西住は理性院流の血脈に連なるれっきとした真言僧と言うことが出来る。すると「入道」にも、血脈に連なる者がいることになる。

以上の点で理解されることは、著者上覚の「僧」「入道」分類基準で選定された、「名誉歌仙」たる出家者達がそれぞれに名を連ねているのであり、また佐藤氏の述べられる如く、その生活様式では、「僧」項と「入道」項に取り挙げられた人々の中で、殆ど区別がつかない在りようをしていた人々が相互に名を連ねているということである。「入道」項の人々は、「官人からの隠遁者」という上覚の分類基準に立って取り挙げられた人々であるが、西行については「入道」項に名を連ねるからといって、兼好や親房と同じ「沙弥」であり「入道」であると言う訳にはゆかぬと思うのである。例えば同じく「入道」項に名を連ねる俊成（法名釈阿）と西行が同じ「入道」とは理解し得ない。その行実において、俊成は一般に我々が理解する「沙弥」像で受けとめるし、西行は自力修行者像が浮かぶ。常盤三寂に比しても、西行の仏道修行の在りようは、静動において理解するなら、はるかに西行は動

的なのである。更に言えば、西住も「上人」と称されているが、「聖」と称呼されることはないので、西行が「同行」と呼ぶにしても、私は西行と西住の宗教生活、仏道修行の実践の上で、異質な何かを考えざるを得ない。従って、『和歌色葉』の「入道二十六人」は、「官人からの隠遁者」という枠内での人選としても、その各人の仏道修行の在り方は各様の、大変に幅のあるものと考えられるのである。

ちなみに九冊本『宝物集』巻末「宝物集近代作者」中の「「紗弥（ママ）十七人」を引用すると、

讃岐法皇、法性寺入道殿忠通、中院右大臣入道殿雅一、右京太夫教長入道、太宰大弐重家入道、右京大夫俊成入道、寂念為業入道、素覚家基入道、空仁大神宮氏人、寂超為業入道（ママ）、寂然頼業入道、道因敦頼入道、西行憲清入道、勝命親重入道、安心成安入道加茂氏人、〔性昭康頼入道〕

（古典文庫による）

とある。この十七人を『和歌色葉』の「入道三十六人」と照らしてみると、教長入道（『和歌色葉』は法名観蓮、『尊卑分脈』は親蓮）・重家入道（蓮寂）・俊成入道（釈阿）・寂念・空仁・寂超・寂然・寂蓮・道因・西行・勝命の十一人が、「入道三十六人」中に名を連ねる。他の法性寺入道殿忠通（円観）と中院右大臣入道殿雅定（蓮如）は、『和歌色葉』の「名誉歌仙」中では「大臣四十三人付贈官」に取り挙げられ、また讃岐法皇（崇徳院）は「帝王二十三代付東宮院号一人」に名を連ね、残る素覚・安心・性照のみ『和歌色葉』の「名誉歌仙」に名が見えない。

この「紗弥（ママ）十七人」の選定基準は崇徳院を含む点において問題はあるが、十七人中十一人が「入道三十六人」に名を連ね、安心は官歴不明だが、素覚は刑部少輔に至り、出家後少輔入道と称され、性照即ち平康頼は検非違使判官であった人物であるから、忠通や雅定も含めても、恐らく『和歌色葉』の「入道三十六人」分類基準たる「官人からの隠遁者」というものと大差ないものであろう。崇徳院については、佐藤氏は、

――保元の乱の合戦に敗れて、「ひそかに僧を一人召されて御髪おろし」（『保元物語』巻中）おわしました崇徳院も、隠遁者とみなしていいであろう。

との御見解を示されているが、[注9] とすると「宝物集近代作者」の「紗弥十七人」は、僧官僧位と無縁な隠遁者ということで選定された人々と理解してよいであろうか。官僧の世界に対して、あくまで外部の周辺的存在、これが『和歌色葉』の「入道三十六人」であり「宝物集近代作者」の「紗弥十七人」であると認めるとしても、全く問題がない訳ではない。それは両方に名が見える空仁の問題である。

空仁は大中臣氏、俗名清長といい、神祇官小副正六位にあった人物と考えられている。殊に西行在俗時佐藤義清は、やはり在俗の西住源季正を誘って、法輪寺で経を覚えるため庵に籠っていた空仁を訪ねており、空仁は義清西行の出家の志を確かめさせてくれた人物と知られている。また空仁は俊恵の「歌林苑」歌人の一人でもあった。その「歌林苑」で、空仁と初めて対面した源三位頼政が、程経て交した贈答歌が家集にある。

少別当入道空仁と申歌よむ者侍と、年比聞わたり侍に、かれも聞て、たかひにいかて相みんとおもひける程に、歌林苑にて人丸影供し侍る日あひて、歌よみなとして後、程へてつかはしける

629 音にのみき、きかれつ、過〳〵て　見きなわれみき其後はいかに

返し

630 恋〳〵て見きわれみえきその、ちは　忍そかぬる君はよにあらし

（『源三位頼政集』下、雑歌。「私家集大成」2による。歌番号は同書）

というもので、ここに「少別当入道空仁」とある点、私は気になるところである。「少別当」とは神宮寺の僧官の

一つである。神宮寺とは神社に付属した寺院のことで、そこで庶務をつかさどる役が「別当」である。「検校」の下位にあり、大・少・修理・別当代などの区別がある。頼政が「少別当入道空仁」と記している点どのように考えたらよいか、私にはよく分からないが、空仁がどの神宮寺の少別当であったか不明としても、ある時期空仁が神宮寺の僧官となったということは確かであろう。とすると僧官についたこともある人物も、『和歌色葉』の「入道三十六人」中に取り挙げられていることになる。「官人からの隠遁者」であり、官僧の世界に属さぬ人々が「入道」項分類基準とする上で、齟齬をきたす。従って「僧三十六人」選定の判断基準は官人出身の出家者で、その実体にはある程度幅があることが分かるのである。

こうしてみると、『和歌色葉』の「入道三十六人」と九冊本『宝物集』巻末の「紗弥十七人」は（歌人としての評価も含め）ある選定の判断基準があるにしても、それぞれ名を連ねる人物は、出家者としてその後の宗教生活は各様であり、「入道」「沙弥」に取り挙げられるということで、前記した如く漠然とした隠遁者像で、並べて一面的に論じる訳にはゆかないと思われる。結局各人個々に、出家者としての仏道修行の在り方、人生営為の問題を究明してゆかねばならぬと思うのである。

この点では、既に佐藤氏が前掲書で、傾聴すべき御見解を示されている。[注10] 即ち、「僧」と「入道」の区別自体の論議より、問題は沙弥あるいは「入道」たる入々の仏教信仰の様態が、多く隠遁への憧憬という形をとるに至ったこと、つまり出家剃髪ということが、官僧の場合を除き、殆ど隠遁と同義であるようになったことが、これらの分類を改めて論議する必要を生ぜしめている、と佐藤氏と述べられる。そして西行や能因らと、俊成・定家あるいは清盛や崇徳院とでは、隠遁に至るまでの道筋や隠遁後の在りようは、外見からの懸隔があるにしても、彼

らは隠遁者として共通の問題を抱え、その様相や深浅が異なるにせよ同じ問いを背及っていたのではないか、と論じられている。この隠遁者が共通に抱えた問題とは、言うまでもなく時代が彼らに要求したものであろう。「同じ問い」というものを、中世の隠遁の問題としてどのように考えたらよいか不明であるが、西行が中世の隠遁を開いたという意味において、「問い」の問題を今後考えたいと思うのである。佐藤氏は更に続けて、

隠遁あるいは隠遁者の在りようは、本来的に多様性を許容するものではなかろうか。むしろ、多様性においてのみ、それは成立しうるのではなかろうか。一義的な在りようは、隠遁あるいは隠遁者には本来あり得ないのではなかろうか。いいかえれば、この多様性をそれとして認識することこそ、隠遁あるいは隠遁者に関わる論議のなさねばならないことであるといえよう。そのことが、隠遁者の外延に関わる規定を、通常われわれが漠然と思い描いている範囲よりも、さらに緩やかなものにさせるのである。

と論じられる。[注11] 各人の隠遁者としての在りようは、自ずからその主体的要求、個人的事情により、多様ならざるを得ないことは自明のことである。前述の如く「入道三十六人」に分類され、あるいは他で称呼された人々の中に、寂昭のような入唐までした求道者もいれば、醍醐理性院開祖賢覚付法の真言僧となった西住や、僧官についた空仁の如き人物も含んでいることは理解されてよいかもしれぬ。「聖」乃至「上人」と称された寂源や西行は、「僧七十四人」中の「聖」「上人」と称された人々と近い生活様式をもっていたと考えてもよかろう。「入道三十六人」に挙げられた人々の中で、「聖」「上人」という呼名を持たぬ人々と西行とでは、その仏道修行者としての在りようは異質なものと考えたい。佐藤氏の如べられる如く、「入道」＝隠遁者としてその多様性を許容した上で、西行と俊成、常盤三寂寂念・寂超・寂然らが、共通の問題を抱えた人々と理解してもよいであろう。しかしやはり、

繰り返し述べるように、その個々の出家遁世後の在り方、仏者としての実践にこそ、我々は独自の境涯を考え、その意義を考えるのである。「入道」は隠遁者として共通の問題を抱えていたかもしれぬが、問題は、隠遁者として背及った問いに対し、個々が自らどのような答えを出そうとしたか、また出したかという点にあると思うのである。

ところで佐藤氏は明遍を取り挙げて論じられるが、そこに、

――聖は、乞食や遊女などとともに、律令体制外に位置するところの、階層外階層を形成する人々である。

聖は、隠遁した官僧、「入道」、あるいは、本寺の研学や修行から脱落した官僧などからなっていた。

と説かれ、『梁塵秘抄』中の歌謡で聖の生活状態の一端を示されて、更に、

西行も、おそらく、こうした聖に近い在りようをしていたであろう。

とされている。[注12]「聖」の中に「入道」も含むとしても、「入道」全てが「聖」でないことは、前述のことからも理解されると思う。西行は「入道」として、官僧と区別される人であったが、「聖」「上人」と称される仏道修行者であり、私はその遁世後の修行者像、あるいは宗教生活がどのようなものか、この点を更に考えたいと思うのである。

三

亀井勝一郎氏は西行の信仰について、「密教の自力修行を根幹とした『雑修』であったと一応言いうるだろう」[注13]と述べられた。西行の信仰・修行が真言密教と深く関係することは、萩原昌好氏[注14]あるいは山田昭全氏の御研究[注15]に明らかなところである。

西行の『聞書集』（「私家集大成」3所収による）に、

醍醐の東安寺と申て、理性房の法眼の房にまかりたりけるに、にわかにれいならぬことありて、大事なりけれは、同行に侍りける上人たちまてきあひたりけるに、ゆきのふかくふりたりけるをみて、心におもふことありてよみける

233 たのもしなゆきをみるにそしられぬる　つもるおもひのふりにけりとは

かへし　　西住上人

234 さそな君こゝろの月をみかくには　かつ〳〵よもにゆきそしきける

という西住との贈答歌がある。ここに「雪」と「白」（素光の色）と「月輪」の結びつきを考えると、これは真言密教の教えに従った歌と言ってよいであろう。[注16] この詞書より西行が醍醐寺の東安寺という理性房法眼賢覚の房を訪れたことを知る。その時西行は、急の重患に死をも覚悟した程であったというのであるが、西行は何故に醍醐寺へ賢覚を訪ねて行ったのか、西行と賢覚はどのような間係にあったのかという点が問題となる。この点は以前私も考えていたことで、私はこの西住との贈答の時期を、西行三十二歳から三十九歳のある時期で、高野入山前に修行していた醍醐寺を訪れた時の出来事と考えてみた。[注17] そこで私は、西行が高野入山前に醍醐理性院で修行したとする川田順氏の説に従いたいと述べた。それは『伝燈広録』続篇第七巻の「醍醐山法師西住伝」に、「与西行作一双」と見えることによるのである。また何よりも西行がその家集において常に西住を「同行」と呼ぶ訳であり、西行に真言密教の修行のあったことは疑いないものと私は考えるのである。また西行が熱心な弘法大師信仰者であることは、仁安三年に四国の大師生誕の地を訪れ、一冬をその地で過ごしたことでも理解される。では何

故に西行は東密の血脈に連ならぬのかということになると、にわかに論じられぬであろう。

前に引用した安良岡氏の御論にある通り、西行は「入道」であり、その社会的位置が真言宗内になく、その規制の外にあったということは確かなこととして、ここで西行が何故規制の外にあったのかということを考えるならば、あるいは山田昭全氏が「西行の意志にもとづいて血脈の外に身を置いたのではないだろうか」と推測されていることは、[注18]当然西行に考えてよいと思う。西行が規制の内に入れない事情というものも考えてみることは必要かもしれぬが、それよりも、西行が出家して、仏道修行者として選んだ隠遁の実践が、後に長年の知友俊成から「円位上人」「円位聖」と称されるものであったとするならば、それは西行の意志によるものと受けとめておくのが妥当な気がするのである。山田氏は前の言葉に続けられて。

とするば、そこに西行の出家者としての容易ならぬ覚悟が秘められていたと思われる。すなわち、ことさら教団の枠組の外に身を置き、絶対的な孤独のうちに、大師や、月や花やに縦横に心を馳せうるいわば魂の自由を彼は確保しておきたかったのではなかろうか。

と述べておられるが、この「魂の自由の確保」こそは、西行が保延六年十月十五日、二十三歳で勇躍出家した際に、最も自身に要求していたことであったかもしれない。

西行の生涯を考えると、私は「自在」という語が強く意識される。そして肉体と精神の共に強靱なイメージ――文覚をして「文覚をこそ打ちてんずる者なれ」と言わしめた『井蛙抄』六の話、六十九歳での奥州平泉の同族藤原秀衡への東大寺大仏復興勧進の旅等による――は、あながち的はずれではないと思う。そのしたたかな面貌は、まさに中世隠遁を開いた西行の、飽くなき自己追求の姿に対する感嘆の心が抱かせるものである。西行が望んだ

「入道」の宗教生活とは、俗社会を離脱し、官僧への道を否定して権威とか体制とか言うものを拒絶したもので、結局頼るべきは己れ一人であり、そのために自身の中から曖昧さを如何に払拭するかということを要求し続けた宗教生活であったと言ってよかろう。とすれば、山田氏の述べられる如く、西行に「容易ならぬ覚悟が秘められていた」ことも理解されるところである。

「入道西行」をめぐって、私はやはり隠遁者として、西行が「上人」「聖」と称呼されるに至る宗教生活がどのようなものであるかを考えたいと思う。『和歌色葉』の「入道」項に名を連ねるといっても、そこには各人各様の宗教生活をした人々がいるのであり、「上人」「聖」と称される人々も多くいるが、西行には西行の宗教生活と独自な到達点があるのであって、究極我々は西行の分け入った独自の境涯を理解しようと努めるのであろう。一口に言えば、西行が西行である点とは何かということを考えることになると思うのである。

補　注

注1　目崎徳衛氏著『西行の思想史的研究』三八二頁。「僧徒の神宮崇敬と参拝の歴史」における西行の位置の問題は興味深い。

注2　亀井勝一郎氏著『中世の生死と宗教観』二〇頁。

注3　安良岡康作氏著『中世的文学の探求』二八五～六頁。

注4　佐藤正英氏著『隠遁の思想 西行をめぐって』八一～八二頁。

注5　同右、八二頁。

注6　注1掲書四〇〇～四〇一頁。『聞書集』所収「たはぶれ歌」に、高雄の「やすらい祭」を実見した歌があることによる。山田昭全氏も「西行新論（十三）」（「明日香」昭51・3）に、この歌が高雄法華会の模様を伝えている点、神護寺再興とともに復活し

たもので、元暦、文治頃確実に西行は神護寺を訪れているとされる。

注7　山田昭全氏「西行晩年の風貌と内的世界――説話と自歌合にひそむ実像――」（「国文学」第19巻第14号）一四二頁。

注8　『発心集』第二、十六「三河聖人寂照入唐往生の事」に、「三河の聖といふ人は、大江定基といふ博士これなり。」（『角川文庫』所収本による）とあって、寂照も「聖」と称呼されている。

注9　注4掲書八三頁。

注10　注4掲書八二～八四頁。

注11　注4掲書八四頁。

注12　注4掲書九四頁。

注13　注2に同じ。

注14　萩原氏「西行の和歌と仏教」（「国文学言語と文芸」第57号、昭43・3）、「高野期の西行――高野入山とその密教的側面――」（『峯村文人先生退官記念論集　和歌と中世文学』所載、昭52・3・25刊）等。

注15　山田氏「西行新論」㈠～㈢（「明日香」昭50・2～昭52・3）の連載中に論じられる。他「月輪観と中世和歌」（加藤章一先生古稀記念論文集『仏教と儀礼』所載、昭52・3・11刊）、「西行の和歌観と密教」（勝又俊教博士古稀記念論集『大乗仏教から密教へ』所載、昭56・9）、「西行最晩年の一首をめぐって」（「国語と国文学」第59巻第1号、昭57・1）等。

注16　注13萩原氏「高野期の西行」一五八～九頁による。

注17　坂口「西行と月輪観――大峰修行の時期を求めて――」（「駒沢国文」第十七号、昭55・3）一六九頁。

注18　山田氏「西行新論」㈢（「明日香」、昭51・1）七頁。